連載

多摩の金融史 15

明治・大正期の第三十六銀行

早川　大介

はじめに

八王子駅北口から一キロほど、甲州街道の八日町交差点の付近にみずほ銀行八王子支店がある。かつては富士銀行の支店であったが、富士銀行が第一勧業銀行・日本興業銀行と統合し、みずほ銀行支店となり今日に至っている。

みずほ銀行八王子支店の起源をたどると、第三十六国立銀行本店に辿り着く。第三十六国立銀行は、明治一一年（一八七八）に谷合弥七ら八王子の生糸・織物商人らにより設立された多摩で最初に設立された地域金融機関である（早川大介二〇一七、二〇二〇a）。明治三一年に普通銀行に転換し第三十六銀行と改称し、経営不振のため大正五年（一九一六）に安田財閥の系列銀行となった。その後、昭和一七年（一九四二）に青梅の武陽銀行とともに安田系列の日本昼夜銀行に合併され同行の八王子支店となり、さらに翌年に日本昼夜銀行は安田銀行に買収された（安田銀行は昭和二三年に富士銀行と改称。第1表）。

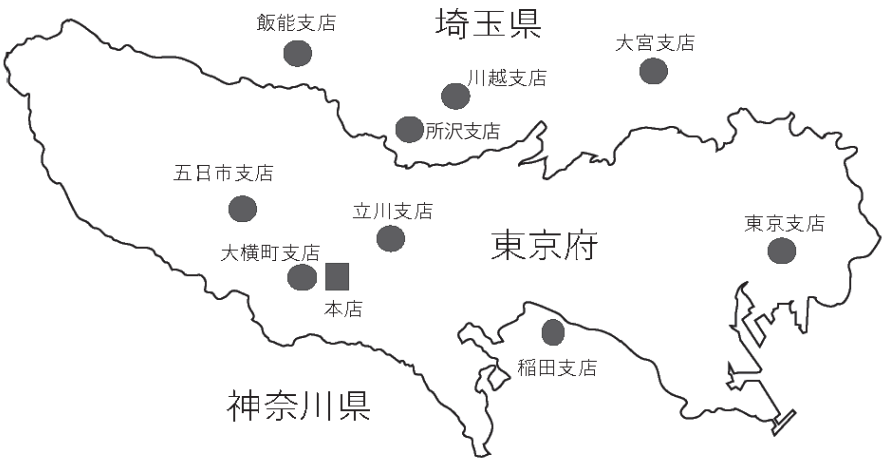
このように第三十六銀行は、国立銀行時代を含めて約六〇年の歴史を有し、八王子を中心に多摩・神奈川・埼玉方面に店舗網を持つ有力な地域金融機関として活動していた（第1図）。しかしながら、第三十六銀行に関しては、戦後編纂された旧安田系企業の事業史・富士銀行の社史のなかで系列化の事情に関して若干触れられているのみであり、地域金融機関としての活動はほとんど明らかにされていない（安田不動産株式会社一九七四、富士銀行調査部百年史編さん室一九

第１表　第三十六銀行年譜

年	事項
1878（明治11）年	２月　第三十六国立銀行営業免許交付
	４月　開業（資本金５万円）
	10月　増資（資本金10万円）
1880（明治13）年	上期　増資（資本金15万円）
1882（明治15）年	上期　増資（資本金20万円）
1896（明治29）年	上期　増資（資本金30万円）
	９月　東京支店開設（東京市日本橋区）
1898（明治31）年	２月　普通銀行転換　第三十六銀行と改称（資本金70万円）
	５月　飯能支店開設
1907（明治40）年	８月　稲生支店開設（神奈川県橘樹郡稲田村）
1916（大正５）年	７月　資本金を25万円へ減資し不良債権の整理
1917（大正６）年	３月　増資（資本金100万円）。安田善三郎頭取に就任
	９月　大宮支店設置
1924（大正13）年	９月　五日市銀行を買収、五日市支店・大横町支店・立川支店を継承
	11月　増資（資本金300万円）
1928（昭和３）年	３月　所沢支店開設（日比谷銀行より買収）
1942（昭和17）年	５月　日本昼夜銀行に合併、同行八王子支店となる。
1943（昭和18）年	４月　日本昼夜銀行、安田銀行に合併、同行八王子支店となる。

出所：早川大介（二〇一七）（二〇二〇a）、八王子市市史編集委員会（二〇一六）、富士銀行調査部百年史編さん室（一九八二）

第１図　第三十六銀行支店一覧（昭和３年末）



出所：第三十六銀行『営業報告書（第62期）』

八二）。終戦までに合併され、一部の店舗が埼玉銀行に譲渡されたことも大きな理由であろう（埼玉銀行一九六八）。

筆者は、八王子市史の編纂に関わり、埼玉県立文書館（埼玉銀行資料）や株主の家文書におさめられていた営業報告書等を利用し、第三十六銀行の歴史について執筆する機会を得た。以下では、これらの成果を活用し、明治・大正期の第三十六銀行について概観することにしたい。なお、紙幅の関係もあり、詳細な内容は、八王子市市史編集委員会（二〇一六）、早川大介（二〇二〇b）を参照されたい。昭和期については別稿を予定している。

一　第三十六銀行の発足

明治一一年に設立された第三十六国立銀行は、普通銀行転換までの約二〇年間、一貫して八王子の生糸商・織物商を中心に経営が行われた。明治二〇年代前半までは、増資も複数回実施し、自己資本を充実させながら、概ねその範囲で貸出を行い、その後は、預金や借入金によりながら生糸や織物などの地場産業の資金需要に応えていった（前掲早川二〇二〇a）。

明治三一年二月、第三十六国立銀行は、営業満期国立銀行処分法により普通銀行に転換し第三十六銀行と改称した（本店：八王子町横山六四番地）。資本金は七〇万円（うち払込済は五五万円）で、筆頭株主は第三十六国立銀行頭取の田野倉淳蔵（糸繭商・質屋）であり、吉田忠右衛門（質屋）がこれに続いた。初代頭取は、高齢の田野倉淳蔵にかわって吉田忠右衛門が就任し、その他の国立銀行時代の役員が留任した（第2表）。国立銀行時代に開設した東京支店（日本橋区元浜町）と新たに明治三一年五月開設の飯能支店の担当の取締役として越智義路、小能正三が就任した。その後、明治四〇年八月、神奈川県橘樹（たちばな）郡稲田村登戸に稲生支店（後に稲田支店と改称）が開設され、日露戦後には東京府・埼玉県・神奈川県にそれぞれ一店舗の三店舗となった。

初期の資金源泉は、預金中心ではなく、自己資本（払込資本金・諸積立金）と恒常的に借入金（再割引手形を含む）に依存していた。預金は、明治三九年までは五〇～六〇万円台でほぼ横ばいであり、明治四〇年末

第２表　第三十六銀行役員・主要株主一覧

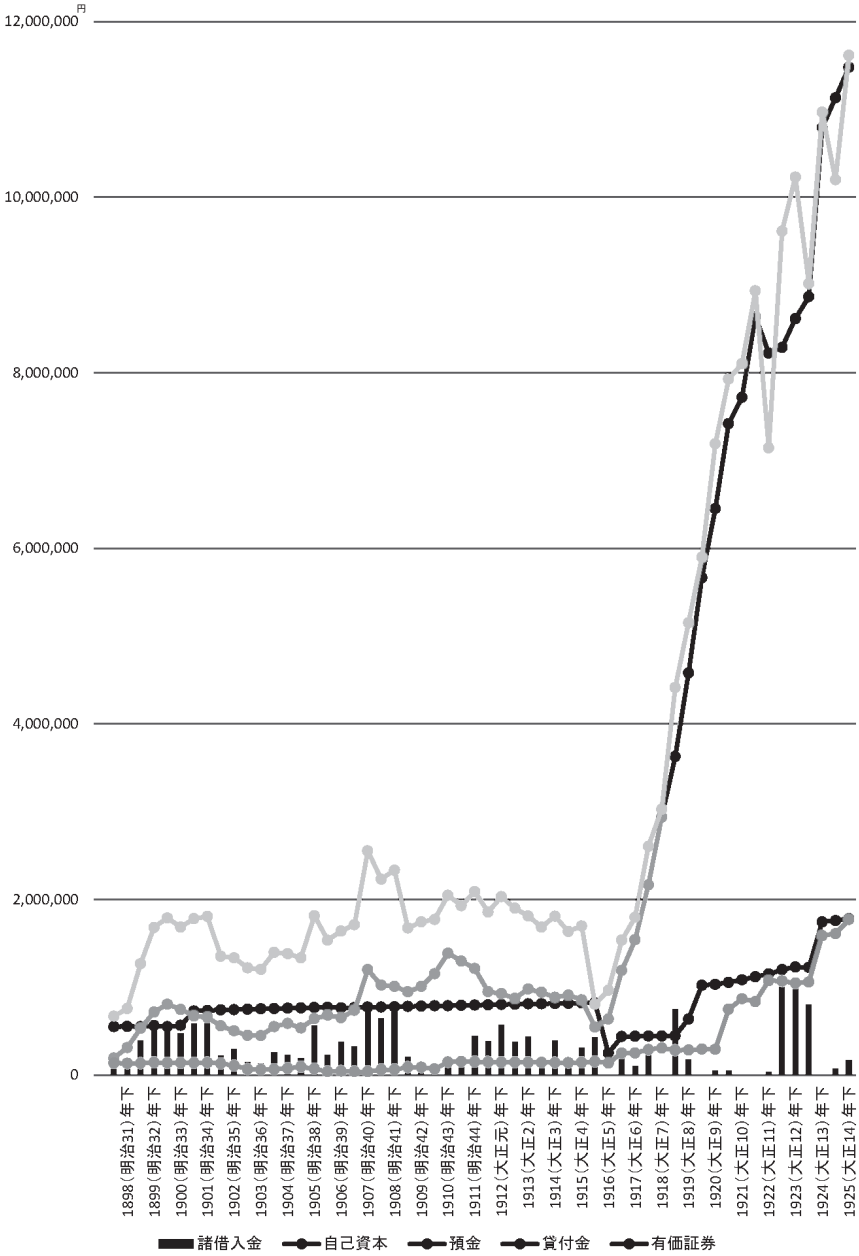
役職	1898年末		1908年末		1917年末		1925年末	
頭取	吉田忠右衛門		吉田忠右衛門		安田善三郎（Y）		安田善四郎（Y）	
副頭取	田野倉常蔵		田野倉常蔵					
取締役	久保兵蔵		久保兵蔵		若菜福朗（Y）		田野倉常蔵	
	●柴田彌市		山口朗貞		田野倉常蔵		天野清	
	越智義路		小泉彌左衛門		安田善衛（Y）		●栗原久作（Y）	
	小能正三		双木八郎		双木八郎		飯田武也（Y）	
							浅野準爺（Y）	
							安田善彦（Y）	
監査役	小谷野貞助		天野清		鈴木安太郎（Y）		園部潜（Y）	
	天野清		渋谷定七		斎藤恂（Y）		綿貫清久（Y）	
					吉田忠右衛門			
主要株主	田野倉淳蔵	640	田野倉淳蔵	800	安田善三郎	2,000	安田保善社	9,300
	吉田忠右衛門	530	吉田忠右衛門	610	木村源兵衛	1,000	安田善四郎	1,780
	平沼伊兵衛	360	平沼伊兵衛	360	渋谷定七	650	山口安兵衛	1,114
	久保兵蔵	346	渋谷定七	333	八王子貯蓄銀行	600	小島駒吉	1,105
	越智義路	340			田野倉常蔵	550	池谷精一	746
					吉田忠右衛門	486	田中定吉	727
総株数	14,000		14,000		20,000		60,000	

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期、『銀行会社要録』各版
注：●支配人を兼務、（Y）安田からの派遣役員

に一〇〇万円を超え、ようやく自己資本を上回った。一方、資金運用の中心は貸付金・割引手形であった（第２図）。当時の貸付先の詳細は不明であるが、東京高等商業学校の調査によれば、第三十六銀行は、「元来生糸商の機関銀行」であり「生糸商が急に資金の必要に迫るときは自己の生糸を担保に入れ」て借入を受け、「貸付金額は担保品価格の六割位」であったという（東京高等商業学校『八王子地方機業調査報告書』一九〇二年）。こうした季節資金の融資のため、借入金や手形の再割引により資金をやり繰りしており、明治三〇年代に安田銀行本店からも度々「製糸金融」の融通を受けていた（迎由理男二〇一〇）。

また、第三十六銀行の関係者は、一口五円未満の零細な貯蓄預金業務を行う関連銀行を別途設立した。明治三一年三月、貯蓄銀行条例に基づいて八王子貯蓄銀行が資本金三万円（全額払込済）で設立された（本店：八王子町横山五三番地）。店舗は、第三十六銀行の近隣に置かれ、筆頭株主は第三十六銀行頭取吉田忠右衛門であり、八王子貯蓄銀行の頭取を兼務した。その他の役員も第三十六銀行との兼務が多かった。

第２図　第三十六銀行主要勘定



出所：第三十六銀行『営業報告書』各期

二　経営不振と安田銀行への救援要請

日露戦後の不況の中で地場産業である生糸価格の下落、織物業の不振もあり、八王子の金融機関の活動は全般的に停滞していたが、大打撃を与える出来事がおこった。明治四一年二月一日、八王子第七十八銀行が東京支店の手形交換尻の決済に差し支え、二月三日よりさしあたり二〇日まで休業に入ることとなった。拡大路線をとり、資金規模で第三十六銀行を凌駕し多摩最大の銀行となっていた八王子第七十八銀行の休業の影響は大きかった。第三十六銀行でも預金取付を受け、本店での支払準備が不足し、資産家からの借入や東京支店から現金を取り寄せて払い戻しに対応した。この預金取付の後、第三十六銀行の預金は停滞し、その後も減少傾向にあった。大正元年には預金総額が一〇〇万円を下回り、借入金への依存も続いた。利益金は、明治四三年末にはそれまでの三万円程度から二万円程度に激減し、配当率もそれまでの八％から五％に落ち込んだ。この過程で後に安田の調査で発覚する多額の不良債権も生まれ、詳細は不明であるが役員間の内紛も生じていたという。

大正四年には、関東近県に支店網や系列銀行を広げつつあった川崎銀行（頭取川崎八右衛門）の八王子支店も開設された。第三十六銀行の株主は、折からの経営不振と有力銀行の進出に対して危機感を持ち、結束して経営陣に対して経営改革を要求した。最終的には大正五年三月、第三十六銀行の経営陣は、季節資金の融資などを通じて密接な関係があった安田銀行へ救援を要請した。安田銀行は、安田善次郎によって築かれた安田財閥の中核銀行であり、明治期から経営不振に陥った銀行の救済を行い、各地の地方銀行を傘下におさめて系列化してきた（由井常彦編一九八六）。

安田銀行は、調査の結果、以下の整理方針を打ち出した。まず、第三十六銀行の大正五年六月末現在の不良債権額を六三万三三一八円と査定した。そして、その不良債権の整理のため、資本金を七〇万円から二五万円に四五万円減資し、その他重役責任弁済金、前期繰越金、諸積立金をあわせて、欠損金を全額補填するとした。その上で、経営再建のために安田銀行より行員を派遣し、再び七五万円増資して一〇〇万円とする

こととした（富士銀行調査部百年史編さん室一九八二）。

三　安田財閥による経営再建

安田の整理方針に従って不良債権の処理を行い、大正六年三月の臨時株主総会で、一〇〇万円に増資し、保善社副総長・安田銀行監督の安田善三郎（善次郎の娘婿）が第三十六銀行の筆頭株主となり、新たに頭取に就任した。そして田野倉らは留任したが、安田銀行より安田善衛（善次郎の甥）、安田銀行の支店長や関連銀行の取締役を歴任してきた若菜福朗が取締役として派遣された（前掲第2表）。また、現場での実務担当として、安田銀行福島支店長などを歴任した山沢平太郎（営業部長、後に取締役兼支配人）、金山音治（庶務部長）が着任した。

再建直後には、『第三十六銀行営業案内』（大正六年六月）という小冊子を株主や預金者に配布した。本文の最後に、「第三十六銀行と安田系銀行団」と題した節が設けられ、「萬々一此銀行団（＝安田系銀行-引用者）中に不測の取付等がありましても、根本から救済の道が講じてあって、厘毛も御得意に損耗を懸けませんから、十分御安心出来得ることと自信致します」と結ばれており、第三十六銀行が安田系銀行として再出発したことを強調した。このように第三十六銀行は、大正六年一月現在で全国一七行、一九〇支店を擁する安田系銀行団の一員となった（第3表）。

そして大正六年九月には、大宮支店（埼玉県北足立郡大宮町）を設置し、預金額は折からの第一次世界大戦の好景気の影響もあって急増し、大正八年末には四五〇万円に到達した。預金の増加に伴い、貸付金もパラレルに増加した（前掲第2図）。利益金も増加し、大正八年末には五万円を超え、配当率も同年には年率一〇％となった。

また、元々、安田善次郎は零細預金を取り扱う貯蓄銀行の経営に消極的であったが、第一次大戦期にはそれを発展させていく方針に転換した。大正八年に安田系列の金城貯蓄銀行が中加貯蓄銀行、八王子貯蓄銀行を相次いで合併し、翌年には安田貯蓄銀行と改称し、その後有力貯蓄銀行に発展していくことなる（浅井良夫一九八二）。

第3表　安田系列銀行一覧（大正6年1月）

金額：万円

銀行名	本店所在地	資本金	支店数	頭取
安田銀行	東京	1,000	21	安田善之助
第三銀行	東京	500	13	安田善四郎
明治商業銀行	東京	480	13	安田善助
肥後銀行	熊本	200	8	安田善三郎
京都銀行	京都	100	5	安田善彌
日本商業銀行	神戸	600	8	安田善三郎
百三十銀行	大阪	500	25	安田善三郎
二十二銀行	岡山	120	9	安田善三郎
十七銀行	福岡	125	4	安田善三郎
第九十八銀行	千葉	50	10	奥山三郎
根室銀行	根室	50	8	安田善五郎
高知銀行	高知	200	19	安田善三郎
信濃銀行	長野	300	12	安田善三郎
大垣共立銀行	大垣	120	17	安田善三郎
正隆銀行	大連	300	8	安田善三郎
第三十六銀行	八王子	100	3	安田善三郎
金城貯蓄銀行	東京	10	7	安田善助
17行		4,755	190	

出所：『第三十六銀行営業案内』（宇津木町高木家文書（補遺）618（八王子市史編さん室所蔵））

四　五日市銀行の合併と店舗網の拡大

第三十六銀行は、大正九年の戦後恐慌以降も以下にみるように支店の新設や五日市銀行の合併などを行い、営業エリアの拡大に努めた。一時的な預金の減少はあるものの経営は比較的順調に推移し、大正一三年下期には預金額一〇〇〇万円を超え、多摩最大の地域金融機関へと発展した（前掲第2図）。資金運用面では、短期のコールローンへの放資や有価証券投資も増加した。有価証券は、株式は特殊銀行株に加え、明治商業銀行、第三銀行、信濃銀行、帝国製麻、東京建物、東京火災保険、帝国海上再保険などの安田系企業の株式が中心であった。債券は、国債、日本興業銀行、日本勧業銀行などの特殊銀行の金融債に加え、安田財閥が出資していた浅野総一郎の東洋汽船の社債も保有していた（第三十六銀行『営業報告書』各期）。

この間、経営陣が、大正一〇年一月、安田善三郎が安田家から離縁されたことにより、かわ

って安田善衛が頭取に就任した。その後、大正一二年一月に安田善造に、さらに大正一四年七月には安田善四郎に交代した（前掲第2表）。大正一〇年には飯能・大宮に続く埼玉の三番目の店舗として川越支店（埼玉県入間郡川越町）を設置した。

大正一三年九月には、五日市銀行（本店：西多摩郡五日市町）を合併した。同行の頭取を長らくつとめた土屋常七は、五日市最大の織物買次商であり、八王子でも織物取引を活発に行っていた。八王子の大横町に八王子支店を開設し、大正八年には立川支店も開設するなど経営規模を拡大させていたが、戦後恐慌と関東大震災の影響で経営不振に陥った。田野倉常蔵は第三十六・五日市両行の取締役として経営に関わっており、第三十六銀行にとっては五日市、立川方面へ営業範囲を拡大できるメリットがあったことが大きな理由と考えられる。この合併に伴い五日市銀行旧本店を五日市支店とし、立川支店・八王子支店（大横町支店と改称）を継承した（石本正紀二〇〇六）。

おわりに

このように、八王子の地場産業の関係者によって設立され、地場産業のための金融機関であった第三十六銀行は、日露戦後から経営が悪化し、安田財閥の下で経営再建を果たした。大正一二年には、安田系銀行十一行の大合同が行われたが、合併後の配当率の維持などの理由から第三十六銀行はこの大合同には組み込まれなかった（由井常彦編一九八六）。このことは、多摩の地域金融にとって大きな意味を持ったと思われる。もちろん安田の傘下にあるので、大口の融資の際には安田銀行の許可を必要としたが、支店に比べれば大きな裁量があったと言える。昭和一七年まで八王子に本店を置く唯一の銀行として地域金融の主要な担い手としての役割を果たしていく。続稿では、昭和に入ってから日本昼夜銀行への合併までの第三十六銀行の動きをみることにしたい。

【参考文献】

浅井良夫（一九八二）「安田貯蓄銀行と安田財閥」成城大学『経

済研究』第七七号
石本正紀（二〇〇六）「明治後期から大正期における地方銀行」（松尾正人編『近代日本の形成と地域社会』岩田書院）
埼玉銀行（一九六八）『埼玉銀行史』
八王子市市史編集委員会（二〇一六）『新八王子市史　通史編五　近現代上』八王子市
早川大介（二〇一七）「地域が生んだ多摩の銀行‐明治期の銀行設立‐」『多摩のあゆみ』第一六七号
早川大介（二〇二〇a）「八王子第三十六国立銀行の設立と展開（1878‐1897年）」愛知大学『経済論集』第二一三号
早川大介（二〇二〇b）「安田財閥と地方銀行の系列化‐八王子・第三十六銀行を事例に‐」成城大学『経済研究』第二三〇号
富士銀行調査部百年史編さん室（一九八二）『富士銀行百年史』
迎由理男（二〇一〇）「明治期における安田銀行のビジネスモデル」粕谷誠・伊藤正直・齋藤憲編『金融ビジネスモデルの変遷』日本経済評論社
安田不動産株式会社（一九七四）『安田保善社とその関係事業史』
由井常彦編（一九八六）『安田財閥』日本経済新聞社

はやかわ　だいすけ
愛知大学経済学部准教授
愛知県名古屋市在住